

ぼくのかんがえたさいカワつんでれろり

赤ぱんだ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

金髪ツインテツンデレロリとストーカーすれすれ男の子との夫婦漫才です。

犬も食いません。

転生素素はちよつとあります

目次

ぼくのかんがえたいカワつんでれろり

ぼくのかんがえたさいカワつんでれろり

「あんたのことなんかぜんつつっぜん好きじゃないんだからー！」

と、僕にとってはご褒美にしかならない事を言ってくれたのは、今年弱冠12歳の金糸の様に輝くツインテールを持ったコテコテのツンデレロリだった。

「クラスで噂になってるんだからす、好きとか簡単に言わないでー！」  
彼女は僕と同年年、同クラスさらには家まで隣と運命感じちゃうレベルの幼馴染だ。しかもめっちゃ可愛い、可愛い。こんな可愛い幼馴染がいつも隣にいたら普通の男児はドギマギしちゃって大変だろうが、僕はちよつと冷静でいられる。何故か？理由は簡単で人生二週目だからだ、心はおっさんなので可愛いものを愛でるといふ感情が働くのだ。うそをつきました、ほんととはロリコンなのにね。

「す、好きとか言うのはフタリキリノトキニ……！」

「ごめんね恥ずかしかつたよね、これからは僕たちにしか聞こえないように紗花ちゃんさやかの耳元で言うね？」

「それはそれで問題あるんじゃない!？」

打てば響く。これぞまさしく夫婦漫才の姿だ、僕と紗花ちゃんは既に夫婦だった？

「紗花ちゃんハネムーンはどこに行こうか？やっぱり王道のハワイがいいかな、それともアメリカのデイズニーランドとかの方がいいかな？」

「急になに！てか学校の下駄箱でする話じゃないでしょーが！」

そうだった幼馴染の可愛さにドギマギして、ここが下校直後の人口密集地であることをすっかり忘れていた！

「くっここは危ない、早く紗花ちゃんの家に行こう！」

「なに変なこと言ってるのよ、どうせあんた押しかけて来んじゃない」

女の子の部屋って童貞には劇薬だよ。好きな子の家だったら尚更かな。

「ただいまー」

「お邪魔します。」

僕たちの家は学校から三十分ぐらい歩いた河川敷のそばにある、結構ここら辺はのんびりした所で郊外になつてゐる。ちなみに学校がある方は結構栄えていて買い物や遊ぶ所なんかも集まつてるので、学校のみんなと遊ぶならそっちになるね。

「あらあら〜ぼく君いらっしや〜い♪」

「毎日お邪魔してしまいすみません」

「お邪魔なんてそんなことないわ〜私も紗花もぼく君が来てくれるの楽しみなのよ〜」

「ママ変なこと言わないでっ！あんたが来るの楽しみなんて事ないんだからね！」

見事なツンデレ構文ありがとうございます。そしてこの正反対のいかにも奥様っぽい喋り方してる奥様が紗花ちゃんのお母さま、すみれさんだ。いやホントに正反対、なにがって喋り方もそうなのだが髪が黒のきれいな濡れ羽色のサイドダウンスタイル（ロングを下の方で結って肩にのせた人妻っぽいヤツ）な上に紗花ちゃんの凛とした釣り目と対照的な穏やかさを感じるたれ目、そして何より遺伝子が残酷なことになつてる大きな胸部だ！

紗花ちゃんに、そんなものは、無い！微塵も、あろうはずが、ごさいません!!」

「聞こえてるわよ変態！ワタシダツテママグライニナツタラ……」

「だが、それでいい!!」

「あらあら〜ぼく君たら、おませさん何だから〜女の子に体のこと言つちやだめよ〜」

「すみません、興奮してしまつて。紗花ちゃんごめんなさい。」

「まあ別にこれでいいならいいんだけどって、なに言わせんのよー!」  
自爆しちゃう紗花ちゃんてなんでこんなに可愛いんだろ、ついついいじめたくなっちゃう。だが今は謝るターン……っ自分を抑えなくては……ッ!

「むしゃくしゃしてやった、今では反省している」

「そんな犯人の供述みたいに言われても……」

「次こそは更生するから！」

「偏見だけどすごく再犯しそうよ今のあんた」

紗花ちゃんのカワイイオーラに勝てるわけがないだろいい加減にしろ！とは言えないよなあ流石に。しかし自分の癖（へき）の事となるとエキサイトするのはどうかしないとな。おつきくなったらマジで犯人になっちゃいそう。というか人生二回目なのにこんな僕ってバカなの？何々、バカは死んでも治らない？あつそっかあ

「今日も紗花のお部屋で遊ぶんでしょ？それじゃ後からお菓子、お部屋に持っていくわね〜♪」

「はい」

「ありがとうございます」

とてもやさしい（小並感）僕たちの家での遊びは基本的にとても自由だ。いや自由と言うかもはや無、各々が好き勝手やっているだけに等しい。唯一二人ですることは精々宿題ぐらいなものだ、何故そんな冷え切った夫婦みたいになっているかという物心ついてからずっと一緒に学校のクラスすらも一緒、さらにはそれでもなお僕がどこでも引っ付いて行くためもはや話題もプライベートもへったくれもないのだ。故に紗花ちゃん⇨僕、僕⇨紗花ちゃんみたいなものである。その証拠に今から紗花ちゃんが夕飯、なにを食べたいのか当ててみせよう。

「紗花ちゃん！君と僕とは天使の双翼さ！」

「キモ。」

まずは僕が確定で知っている今日の給食から推理してみよう。今日はなんと中々給食では出ないハンバーグの日であった、しかも魚肉や豆腐といった小細工抜ききの牛肉ハンバーグである！これには学年中、いや学校中が沸き立ちいつも不愛想な先生も菩薩の笑みを浮かべ、擦れたあの子も無邪気に笑い、おとなしいあの子もスキップしだす理想郷がそこにはあった。もちろん僕も浮かれに浮かれ、勢い余って今までのいたずらを告白しても許されそうな雰囲気だった（その場

は凌げたが放課後きっちり絞られ、結局解放されたのは紗花ちゃんの部活が終わった直後だった)

「紗花ちゃんが下駄箱で待っていてくれて嬉しかったよ。」

「ハア?」

そんな今日の給食を終え恐らく今、紗花ちゃんは僕と一緒にいることも相まって幸福感で溢れている。となれば晩御飯は余韻に浸れる様なあつさり系、蕎麦やうどんがいいはず。っと普通は考えるが僕|| 紗花ちゃんは一味違う。ズバリ紗花ちゃんは夜ご飯も『攻め』に行くツ! どうしてそう断言できるのか! それは紗花ちゃんのテンションから分かる。今日の紗花ちゃんは上で言ったツンデレ構文が多い、これがどうしたのかというと普段構文を口にするのと僕にすぐ可愛いとか言われて言葉狩りされてる紗花ちゃんの気が緩んでいる日! そしてそんな日の紗花ちゃんは! エネルギーを求めている!! QED 証明終了

「紗花ちゃん、君は今日『肉』を求めているんだねツ!」

「二食お肉はキツいわよ。今日はさっぱりお蕎麦かしら♪」

ふっ、いい女には秘密が多くて困っちゃうね。ま、そんなところも可愛いんだけどさ。さーてと今回の推理は僕が肉を食いたかったつてのにちよつと引つ張られちゃったかな? もちろん蕎麦でも良かったけど? むしろ紗花ちゃんの深層心理を読んだつていうか? 逆に僕の心理は分かってないんだなーみたいなの?

「そういうあんたはお肉たべたそうね」

「えっな、なんででござるか?」

「そんなの顔見りや分かるに決まってんじゃない♪何年あなたの幼馴染やってると思ってるのよ」

これマジ? 女の子に比べて男の方が釣り合ってなさすぎるだろ。

「そーだよね……普通顔見ればわかるよね……」

「あーもうなにしょげてんのよ! 別に分かんなくなつたつていいわよ」

「ほんと……?」

「いつも隣にいてくれたのは他の誰でもないあんたなんだから。そ

れに12年でわからないなら24年だろうが36年だろうが106年だろうが付き合ってやるわよ」

「き、きやがちゃん！」

「だから私がツンデレでもロリでもなくなつてずっと一緒にいるのよ。いいっ？」